

論 文

景福宮(朝鮮)継照殿の日本移建とその後―附…指図による朝鮮館(寺内文庫)の復元―

渡 辺 滋

はじめに⁽¹⁾

桜圃寺内文庫(以下、寺内文庫と略称)は、朝鮮総督・首相などを歴任した寺内正毅(1852～1919)の蒐書に、関係者の寄贈本を加えて成立した文庫で、現在は山口県立大学ほかに分蔵されている。その内実について、かつては検証不足な情報から不正確に語られる事例も目立ったが、近年の諸研究によって実態が解明されつつある⁽²⁾。ただし本稿で取り上げる「朝鮮館」の問題など、いまだ十分に判明していない点も少なくない。

現在、旧敷地内には本館1棟のみが現存するが、開庫(1922年)～1950年頃までの寺内文庫は2棟の建物からなっていた。本館は1920年5月に着工し、翌年末に竣工した鉄筋コンクリート製2階建ての建物である⁽³⁾。このほか、かつては「朝鮮館」⁽⁴⁾と称される建物も立っていた。後者をめぐっては従来も検討されているが、とくに建設時期や、建物の性格などをめぐって不明な点も少なくなかった。そこで本稿では以上の諸点を中心に、かつて寺内文庫の敷地内に建っていた「朝鮮館」に関する考察を行う。

第一節 朝鮮館をめぐる基本情報

まずは先行研究の成果も参考に、基本情報を確認しておこう。敷地内に朝鮮館が存在した期間は、寺内の生前(つまり文庫の正式開庫前)からである。このことは、たとえば『井口省吾日記』1918年6月5日条・『朝日新聞』1919年10月22日朝刊(いずれも本文は後掲)などから確認できる。この時期の朝鮮館は、たとえば「桜圃文庫処務の概要」(山口県立大学 寺内文庫新収21―15―2)に「(1921年)十二月二十七日ニ、建築現場監督進藤喜一ヨリ、文庫建物并ニ朝鮮館ノ鍵全部ヲ引継ギ、受領スルヲ得タルヲ以テ、翌二十八日、朝鮮館内格納図書ノ文庫搬入ヲ開始」とあるように(原文に、読点を適宜補っ

た)、正式開庫に備えて「図書」(古典籍・古文書など)を格納する施設として利用されていた。上記史料によれば、開庫2ヶ月前に本館が完成すると、収蔵していた古典籍類はそちらに移されている。それ以降は、長く文庫の附属施設として利用され続けた。1930年代末以降、修理費がたびたび計上されているが、太平洋戦争後の混乱で整備は不十分となり、1952年4月以前に倒壊・撤去されたと考えられる(後述)。

この建物の性格について、かつては日本国内で設計された朝鮮風の建物という見解や、朝鮮昌徳宮の殿舎を移建したものなどという情報もあったが⁽⁵⁾、近年の研究により、景福宮(李氏朝鮮)の東宮(王の世子のための施設)エリアから移建された宮殿建築であることが判明した⁽⁶⁾。これは、朝鮮館を写した古写真(防長尚武館所蔵)に見える立札に「此の建物は現朝鮮総督府庁舎新築の際、景福宮の一部が取り除かれるに当り、寺内元帥が之を譲り受け□□移築せられたるものなり。本殿は丕頭閣と称し、王太子の学問所に使用せられたるものなりと伝へらる」とあるところから指摘された情報である。

まず、この建物が朝鮮半島から移建された時期を検討しよう。景福宮の創始は、14世紀末まで遡る。李氏朝鮮を建国した李成桂(1335～1408)は、まず首都を漢城府と定めた(1394年)。翌年、都城の建築が開始されると、権臣鄭道伝は中心に位置する宮殿を「景福宮」(出典は『詩経』大雅)とし、あわせて各殿舎の名称もそれぞれ命名した(『国朝宝鑑』巻一による)。これらの殿舎は豊臣秀吉の朝鮮出兵に際して全焼し(1592年)、数百年にわたり廃墟のまま捨て置かれていた⁽⁷⁾。このうち李朝末期(1865～1872年)、農業試験場が置かれていた景福宮の故地に宮殿が再建設される⁽⁸⁾。日本統治期を迎えたのは、これらの新造された殿舎群であった。つまり建設後、半世紀を経っていないかなり新しい宮殿建築ということになる⁽⁹⁾。

その諸施設の撤去は李朝末期に始まるが、日本統治期に入っても引き続き、期間的にも数年を掛けての作業となった（後述）。とくに東宮エリアの諸施設の撤去がなされたのは、1915年に開催された「朝鮮物産共進会」のための会場整備作業の過程である。同会は、景福宮で開催されることとなり、72000坪の敷地のうち41550坪を会場として利用する計画が立てられ、数年前から用地整備や各種パビリオンの設置準備などが始められていた¹⁰⁾。その過程で、朝鮮総督府は、李朝による再建後もほとんど利用されないまま、とくに日本統治期以降はほとんどお荷物と化していた殿舎群のうち、「已二類破朽損シテ修理ニ堪ヘス、不潔不体裁ノモノ」を中心に「大正三年（1914）七月中、代金一万一千三百七十四円七十銭ニテ公売」¹¹⁾したのである。

「公売」の結果について、たとえば「旧建物競売好績」（『毎日申報』1914年7月10日付）では、主な建物4棟の落札者・落札価格などが報道されている。それによれば、建物は6150〜477円で落札されており、落札者は1棟が秋葉邦太郎（京城在住の不動産屋）・1棟が藤田国太郎（総督府官吏）・2棟が李潤昌（実業家）となっている。ただし後述するように、公売された殿舎のいくつかは移建先が判明しており、それらの所有者と落札者の氏名は合致しない。つまり落札者の多くは、営利転売を目的としていたか、実際の購入希望者の代理人である可能性も想定される。

ともあれ、こうして東宮エリアの諸殿舎は解体・売却された。当然ながら、それが山口県に移建されるのも、この時期以降である。それでは、実際に山口県で朝鮮館の存在が確認できるのは、いつなのだろうか。その時期を示す最古の史料は、管見の範囲では1918年まで下る。

いまだ寺内が生存している時期、歩兵第42連隊の閲兵を行うために山口（寺内の故郷）を訪れた井口省吾（1855〜1925）陸軍大將は、閲兵後、県知事のすすめのあつて周辺の名所・旧跡などを散策している。その過程で、「宮野村ハ寺内首相ノ生地ニシテ、旧邸ニ鮮式ノ建築物ヲ見ル」（『井口省吾日記』1918年6月5日条）という記事が出てくる。

寺内は井口に好意を持っていたらしく、『井口日記』には折々に寺内からプレゼントを貰ったり、食事への招待を受けたりする記事が見える。一方の井口の側は、それほど寺内に対して親しい意識は持っていない様だが、東条英教（英

機の父親）と寺内が確執を生じた際、両者の間に入って仲を取り持っているし、1915年からは寺内朝鮮総督に朝鮮駐劄軍司令官として仕えている。そのような関係も背景として、井口大將は今回、山口を訪れた際、寺内の郷里を見ておこうという気になったものと思われる。あるいは当時、寺内が現役の首相であったことも関係しているかもしれない。

ここで井口が、寺内の実家を訪れた際に見たという「鮮式ノ建築物」というのが、景福宮から移建した宮殿建築と考えることに問題はあまい。とすれば、1914年に売却された建物は、おそらくとも1918年には寺内の実家の庭に移建されていたと確認できることになる。同じく東宮エリアから日本国内に移建された資善堂の場合、落成式は同年八月なので（『寺内正毅日記』1916年8月30日条）、これよりは後の移建の可能性がある。とすれば寺内が実家の脇に宮殿を移建したのは、あるいは資善堂の移建に触発された結果かもしれない。ともあれ本館建造（1921年）以前、この建物1棟が宮野に移建されたうえで、「寺内文庫」と命名され彼の蔵書の保管庫となっていたことは、以下の新聞記事からもうかがえる。

周防国宮野村字桜岡にある寺内家は伯が七歳の時養子となつた寺内勘右衛門の住宅に僅かに客室を継ぎ足したに過ぎず朝鮮総督時代に手に入れた景福宮の一部を持帰つて邸外に建設し将来は図書館にすべく「寺内文庫」と命名さへしてあるといふ事である（『朝日新聞』1919年10月22日朝刊）

これらの史料による限り移建の具体的な経緯は判明しないが、関連記事が『寺内日記』にまったく見えないところから推測すると、日記の記事が抜けている時期の出来事と推定される。彼の日記は首相就任後の多忙と体調悪化により、1917年7月末〜8月末あたりを先懸として記事の欠損が目立つようになる（10月以降は、辞職直前の時期を除き、断続的にしか記載されない）。おそらく、この時期に移建作業が進められたのであろう。

なお寺内死後の資料ながら、断片的な関連情報が熊谷直之（鳩居堂）から寺内寿一（正毅息）宛の手紙に見える。ここには、移建工事を担当した大工について「工匠既ニ故人ニテ」（1921年4月9日熊谷直之書状）山口県立大学寺内文庫新収2-10¹²⁾とあるので、おそらくは比較的高齢の京都の宮大工が、1915〜18年頃に移建の工事を担当したと考えられる。『寺内日記』によ

ると、この件に限らず彼と鳩居堂のやりとりは何回かみられるので、そうした縁から京都在住の宮大工の紹介を頼んだのではなからうか。詳細は不明だが、寺内は同じ景福宮の資善堂についても東京移建の際にアドバイスをしているようなので、同一の宮大工によって移建作業が進められた可能性があるかもしれない。

第二節 朝鮮館は東宮のどの殿舎だったのか

つぎに、山口県へ移建された殿舎が、かつて景福宮のどこに建っていたのかを検討しよう。すでに紹介されているとおり、寺内文庫の敷地内に建っていた朝鮮館の由来については、その前にあった立札に見える「景福宮の一部が取り除かれるに当り、寺内元帥が之を譲り受け□□移築せられたるものなり」という文面が明らかにしている。

この情報は、寺内死後の寺内文庫では、この建物に由来について、以下のよう言い伝えられていたことを示している。

・かつては朝鮮の景福宮にあつた殿舎である

・景福宮の殿舎の一部が撤去された際に寺内が譲り受けたものである

それでは、寺内はだれから「譲り受け」たのであろうか。この点については、台湾総督として任地に赴任する途上、当地を訪れた田健治郎(1855～1930)が関連情報を残している。田は生前の寺内を側近として支え続けた人物で、寺内の死後、寺内ゆかりの地を回った際には感傷を隠せず、日記に詳細を記録している。そのなかで、寺内の実家の周辺を回った際の記事に「朝鮮館有り。伯生存中、李王賜る所の殿堂を爰に移築、図書館の一部に擬すと云ふ」(『田健治郎日記』1922年12月17日条)とある。これによれば、田が寺内文庫を訪問した際、朝鮮館の由来について「伯生存中、李王賜る所の殿堂」という説明を受けたことが分かる。こうした情報を総合すると、ここで朝鮮館と称される建物について、寺内死後の寺内文庫の関係者は、朝鮮王朝の最期の国王である純宗から下賜された建物と認識していたことが確認できる。

ただし、この言い伝えには、少なからず不正確な情報が含まれている。とくに、景福宮の諸殿舎の撤去が本格的に進められた時期、その管理権はすでに李王家ではなく総督府へと移管されていた(後述)。移管の理由については、総督

府側で本庁舎の整備を進めるための敷地を必要としていたことも指摘されるが、一方で当時の李王家がこの広大な宮殿を管理するための財政的な余裕を失っていたことも背景と見なされよう。いずれにせよ、この段階における東宮エリアの殿舎群は、李王から総督が「賜る」対象ではないことになる。「山口県吉敷郡宮野村寺内伯爵邸内寺内文庫は其(※一般への公売)の際該建物を購入移築したものの」¹³⁾という指摘によるべきだろう。

ところで、この建物は景福宮のどの殿舎を移建したものだろうか。先に紹介した寺内文庫の立札では、景福宮からの移転を説明する文面に続けて、「本殿は丕顕閣と称し、王太子の学問所に使用せられたるものなりと伝へらる」と説明する。ここで気になるのは、景福宮からの移建を説明する前半の断定調の文章と比べて、後半の「丕顕閣」に関する説明でやや歯切れが悪い点である。

この殿舎が、もと景福宮の丕顕閣として建設されたものという情報は、当時の寺内文庫で広く信じられていたらしく、1930年代に観覧した人物も「寺内文庫は此地出身寺内正毅元帥の旧邸の一部に建設せるもの、即ち旧邸・文庫と寺内記念館と称する朝鮮景福宮丕顕閣の一部を移建せる建物とがある」¹⁴⁾と記録している。しかし結論からいえば、これは誤情報である。

移転元の建物を確定するには、同時期に景福宮から撤去された殿舎全体を確認する必要がある。そもそも1911年に景福宮全体の管理権が李王家から総督府に移管された頃から数次にわたる建物の売却が進められたのは、十分な財源を持たない朝鮮総督府が京城市区改正の財源を捻出するための苦肉の策だった¹⁵⁾。本稿で問題とする1914年の売却は最終段階に当たったが、これは先に触れたとおり「朝鮮物産共進会」の会場設営に伴う処置でもあった。その際の売却で多くの建物が整理されたが、整理以前の宮殿図を見る限り、主に売却対象となった建築物は東宮エリアと興礼門周辺に集中していた。

この公売では、建物13・門10・便所2など、計25件が入札されている¹⁶⁾。売却については、詳細を記す史料本文を掲げておこう¹⁷⁾。

敷地ノ整理 景福宮構内ヲ会場ニ充用スルニ付テハ、在来諸建物其他、成ルヘク旧観ヲ改メサルノ方針ナルハ勿論ナルモ、各所ニ散在セル堂宇又ハ門墻ノ類ニシテ荒廢ノ久シキ、已ニ頹破朽損シテ修理ニ堪ヘス、不潔不体裁ノモノ亦尠ナカラス。依テ是等不用ノ建物ハ、此機ニ於テ之ヲ一掃スルコトトシ、

即チ勤政殿前面ノ興礼門及之ニ連ナル廻廊其他東方空地ニ於ケル東宮、資善堂、丕頭閣、侍講院等ノ諸建物、竝ニ所在不用ノ門牆類ハ、其利用シ得ヘキ石材類ヲ除キ、建物十五棟門九箇所、此総建坪七百九十一坪八合ヲ、大正三年（1914）七月中代金一万一千三百七十四円七十銭ニテ公売シ、又障害立木二十六本ヲ、同年九月中代金六拾叁円ニテ公売シタリ。

ここで報告されている公売の総額は、「旧建物競売好績」⁽¹⁸⁾に見える甲乙丙丁4件の落札代金11377円とはほぼ合致するので、同一の競売について述べていることは明らかである。ただし、個別の落札対象などについては、個人情報ということもあつて全情報が開示されておらず、不明な点も少なくない。たとえば前述の官報に記された各建造物の平面積が、宮殿の純粹な平面積なのか、廂下まで含めた面積か、あるいは基壇の面積まで含めたものかは判明しない。また表示された床面積を見る限り、主要建築物だけでなく周辺の回廊部分まで、個別に「建物」と表現しているようなので、どの「建物」が中心的な殿舎に当たるかも判断できない。

そうした制約もあつて、「旧建物競売好績」からは、撤去した4棟の建物を6150〜477円で売却したことや、秋葉邦太郎（京城在住の不動産屋）・藤田国太郎（総督府官吏）・李潤昌（実業家か）などが落札者であることは判明するが、「甲」（唯一、呼称が明記されている「興礼門」とその周辺附属施設）を落札した李潤昌を除き、資善堂や丕頭閣をだれが落札したのかは特定困難である。ところで、やや気になるのは、この際の公売に関する諸史料のなかに、東宮エリアの主要殿舎のうちでも繼照殿の名称が見えないことである。総督府が残した関連史料でも、この際に撤去・売却された殿舎として挙がるのは、東宮内の資善堂・丕頭閣・侍講院などに過ぎない。繼照殿の跡地は其進会の際にパビリオンの敷地となっており、他の施設と同時期に撤去されたことは確実だが、入札に関連する諸史料にその名称は見えないのは何故だろうか。この点については、後でまた触れたい。

以上のように東宮エリアの殿舎の公売について概略を確認したうえで、つぎに、どの殿舎が山口に移建されたのかについて、平面図の形状から検討を進めていこう。幸いなことに、往時の景福宮については総督府の作製した図面が残されており（第三節も参照）、また寺内文庫の朝鮮館についても平面図が現存し

ている（前述）。まずは前者の検討によって、主要殿舎の特徴を確認しておこう。

まず敷地整理前の状況を記録した「景福宮配置図」⁽¹⁹⁾によれば、各殿舎の寸法（↓縦横比）が判明する。全体図からの採寸なので細部の不正確さは否めないが、各建物のおおよその寸法は資善堂（縦26尺×横50尺↓縦横比は約1:2）、丕頭閣（縦12尺×横50尺↓縦横比は約1:4）、繼照殿（図では繼昭庁、縦25尺×横43尺↓縦横比は約1:1.7）である（建設の際に用いられた単位は朝鮮の造管尺だが、これは日本の尺とほぼ同じ）。各建物には基壇が付属し、その形状は資善堂・丕頭閣は1段で、繼照殿は2段（前面に張出）であった。繼照殿のみ基壇が大規模なのは、東宮エリアで最も格の高い殿舎だったからである。

このように各殿舎は、規模・形状ともに異なった特徴を持つている。これを現存する朝鮮館の実測図（数枚の平面図や起こし図、堂内の調度品図などからなる）と比較してみよ

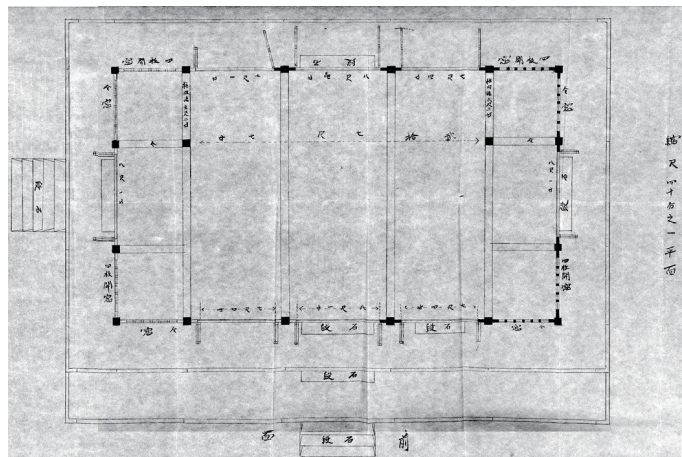


図1：平面図

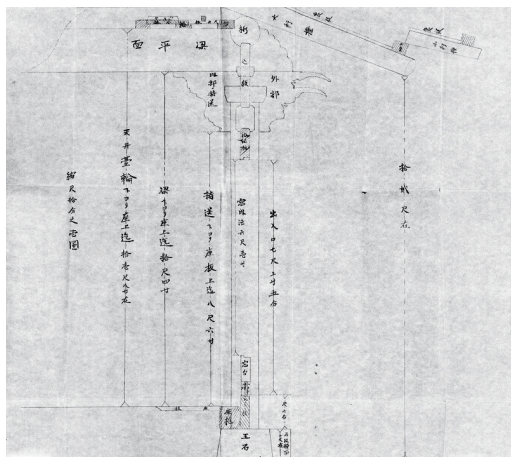


図2：断面図



写真1：寺内寿一との集合写真（防長尚武館所蔵）

う。この図には、柱間が縦3間×横5間で、基壇2段を前面に張り出す構造の建物が記されている(図1、2)。こうした特徴は、朝鮮館の古写真(防長尚武館所蔵・山口市広報広聴課所蔵のものなど)などから確認できるので(写真1)、かつての朝鮮館の図面と考えると問題ない。

そこで、この図面によって殿舎の寸法を確認すると、縦24尺×横42尺と判明する(↓縦横比は1.1・75)。そうした特徴を、総督府作製の平面図に見える東宮エリアの諸殿舎と比較すると、繼照殿のデータと極似する点が注目される。殿舎の寸法は1尺程度のズレに収まっており、殿舎の縦横比や基壇の形状・寸法もほぼ一致する。一方、資善堂・丕頭閣とは、ほとんど一致する要素がない。景福宮内に、ここまでデータが近似する他の殿舎の存在が確認できないことをふまえても、寺内文庫の敷地内に建てられていた「朝鮮館」は、もともと景福宮の東宮エリアで繼照殿として利用されていた殿舎と考えるべきだろう²⁰⁾。

こうしてみると、先に紹介した「本殿は丕頭閣と称し、王太子の学問所に使用せられたるものなりと伝へらる」(朝鮮館前の立札)などの情報は、晩年の寺内が確たる説明を残さなかった故の情報錯綜の結果と判明する。前述したように、首相就任後の寺内は職務多忙と、それによる極度の体調悪化から、とくに後半期には日記すら十分に付けられないほどの状態に置かれ続いていた。前掲の鳩居堂から寺内寿一宛の手紙(つまり寿一から鳩居堂への問い合わせ)が出された背景も、息子寿一すら朝鮮館の由来について十分な情報を持っていなかった結果と推定されることをふまえれば、寺内文庫周辺で不正確な情報が語り伝えられていたこともやむを得ないだろう。

さて、朝鮮王朝の世子(王太子)が利用する東宮エリアは、「東宮(在建春門之内)・宮城(周回一千八百十三歩)」。東門曰「建春」、西曰「迎秋」(『世宗実録』地理志 京都漢城府)という史料によれば、宮城の東門(建春門)の内側に、つまり宮城の東側に位置していた。そこには先述したような各種の殿舎が立ち並んでいたが、このうち繼照殿(李朝実録では「繼照堂」、あるいは「繼昭庁」とされる場合もある)という建物は、中心的な宮殿だった。この宮殿は、「構」王世子受朝堂于建春門内、名曰「繼照」(同 二十五年(1443)五月十二日条)とあるように百官の朝賀を受けたり、また以下の諸史料にあるように客人(外国から来た使者など)と面会したりする会場として使われていた。

たとえば日本の大内氏が派遣した使者は、繼照堂で王太子の引見を受けている。

「議政府執禮曹呈啓、大内殿使送客人、東宮引見時、通事引客人、詣繼照堂庭下」（『世宗実録』世宗二十七年（1445）二月三日条）

「大内殿所遣所吾古等、詣勤政殿庭、献土物、肅拜訖、又詣繼照堂、再拜、世子引見堂内」（同二十七年（1445）二月十二日条）

「日本国大内殿多々良教弘、遣聖孫等十三人、来献土物、世子引見于繼照堂」（同二十九年（1447）十二月二十九日条）

この建物は、朝鮮王朝実録を見る限り、『中宗実録』二十五年（1530）六月二十五日条の記事を最期に利用事例が確認できなくなる。これは1543年の火事を端緒として、16世紀中頃以降、再三にわたって被災が続いた結果だろう。つまり周囲の諸施設と同様、16世紀のうちには廃絶したと考えられる。大正期に日本へと移建された繼照殿は、その後、19世紀後半に宮殿全体が再建された際に新造されたものということになる。つまり、完成して半世紀程度で解体されたのである（詳しくは後述）。

なお前述したように、東宮エリアの殿舎が競売に付された際の諸史料のなかで、繼照殿について言及するものが確認できないことは、やや不審である。寺内の性格からして、一般人対象には競売を実施しておいて、自分だけは無償で入手などという特別扱いは考えにくい。この殿舎のみは競売に付さず、彼自身が直接買い取った可能性も想定できるかもしれない。その場合、彼が繼照殿に興味を引かれ購入した要因としては、この建物が東宮エリアの諸殿舎のなかで最も格の高い建物ということ、基壇が二重になっている点など見栄えがよかったことも関係するかもしれない（まったくの憶測ではあるが）。

第三節 景福宮と東宮エリアの他の殿舎の行方

最期に、繼照殿が建っていた景福宮そのものや、そのうちの東宮エリアの沿革について、また繼照殿以外の殿舎の行方などについても概説しておく。（図3）

先に述べたように、現在の景福宮は16世紀後半に廢墟と化した後、高宗の即位後、摂政大院君（1820～1898）によって復興されたものである。その

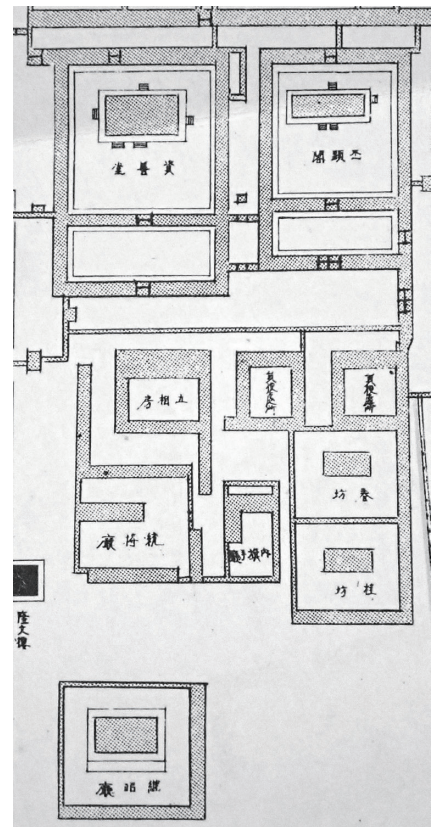


図3：東宮エリア

際の宮殿の出来映えは優れたもので、「朝鮮王朝時代末期に建築された韓国最大の宮殿建築である。自然と良く調和するように試みられた配慮と、綿密な計画によって国力を傾けて造った王宮で、その雄壮な規模と繊細華麗な手法は統一新羅時代や高麗時代の建築に劣らない優れた建築」と評されている。

ただし当時の国王（高宗）はこの宮殿をほとんど利用しないまま、1874年には昌徳宮に移っている。この移徙の背景については「大院君が再建した景福宮を捨て、以前の王宮に戻る。高宗は、この行為により、諸事を大院君執政期の以前へと戻すという、自らの強い意志を表そうとした」と推定される。こうした経緯の末、とくに1895年以降は完全に利用が放棄され廢宮と化し、日本統治時代（1910年～）には、朝鮮物産共進会の開催（1915年）や朝鮮総督府庁舎の建設（1916年～）などの過程で、主要殿舎を残して撤去された。

以上の過程で注意すべきは、3世紀近い空白期の後に再興された景福宮と、それ以前のものとの連続性である。先行研究では、度重なる増改築によって、16世紀末に全焼する頃の景福宮の姿はすでに当初と大きく様変わりしていたとされる²⁴⁾。さらに大院君による重建は、この16世紀末の形状を参考に行われたとはいえず、恣意的な改変も目立ち、創建当初の形態とはかけ離れた姿となっている²⁵⁾。とくに殿舎の配置については、現存する古図の分析などから推定する限り、東宮エリアも含め、形状や殿舎配置など当初とは大幅に異なってい

る²⁶。

以上のような全体の変遷を念頭に置いたうえで、つぎに東宮エリアの沿革を確認しよう。景福宮には、当初、東宮専用の施設が設けられていなかった。東宮が「闕」（宮殿敷地）内に「新作」されたのは、1427年のことであった（『世宗実録』世宗九年（1427）八月三日条）。その後、1543年には東宮の全焼事件が起る（『中宗実録』中宗三十八年（1543）正月七日条）。早速、修理の責任者を任命し、年末を目標に完成を目指している（同正月十日条）。しかし1535年に再度被災し（『明宗実録』明宗八年（1553）九月十四日条）、その際の再建が終了したのは、ようやく1年後という状況だった（同明宗九年九月十八日条）。この後は、豊臣秀吉軍の侵攻に伴う混乱のなかで生じた姦民・乱民の暴動によって景福宮全体が焼失し（『宣祖実録』宣祖二十五年（1592）四月十四日条）、再建は果たされなまま3世紀近い年月を送ることになる。

19世紀に入って、高宗の摂政大院君が再建を企図し、さまざまな困難（とくに財政面）を乗り越えて実現したことは、先述したとおりである。その際に新造された東宮エリアの諸殿舎のうち、繼照殿の敷奇な運命についても既述した。ここでは、その他の2つの主要な殿舎の行方について、概説しておこう。

まずは、寺内文庫への移建が誤伝されていた丕顛閣について。「丕顛」は直訳すると「大いに明か」（『大漢和辞典』）の意で、中国の古典などで王の偉大さを強調する表現として用いられる決まり文句である。この殿舎の場合、直接には「伊尹乃言曰「先王味爽丕顛、坐以待旦」（『書経』太甲篇上）」という表現を元としている。初期の景福宮において、丕顛閣は独立した殿舎ではなく、「御丕顛閣」（思政殿東隅内廂庫二間置「窓牖」、以為「燕居之所」、賜名曰「丕顛閣」）（『世祖実録』世祖九年（1463）十一月八日）・「丕顛閣 在思政殿東偏」（『東国輿地勝覽』卷一 京都上「宮城」項など）とあるように、思政殿の東側の内廂の下を窓牖を作るなどして区切って王の「燕居」（くつろぐ場所）として利用するところから始まったらしい。のちに独立の殿舎となった段階でも、古図に見える情報をふまえると、思政殿の東側（つまり大院君期に資善堂・丕顛閣が置かれたエリア全体）を占めていたと考えられる。当初の景福宮で丕顛閣の利用を確認できる最期は、「上夜対「丕顛閣」、講「大学衍義・宗敬畏篇」（『宣祖実録』十四年（1581）正月一日条）、つまり国王臨御の元で漢籍の講

義が行われたという記事である。以降は、過去の前例を紹介する文脈などで登場するのみで、実際の利用事例は確認できなくなる。おそらく、宣祖二十五年（1592）の火事で焼失した結果だろう。

ここで注意する必要があるのは、丕顛閣は語源からも分かれるとおり、王による利用を前提とする施設という点である。実際、朝鮮王朝実録に見える多数の記事には、いずれも「上」（国王）が臣下とともに何らかの行事を行う施設として見える。つまり丕顛閣を東宮エリアに置くあり方は、本来のものとは異なっているのである。丕顛閣が東宮の施設とされたのは大院君による再建以降の可能性が高く、そうした点からも、この際の造営（さらにはそれを継承する現在の復元王宮）の、初期形態との不連続性を象徴的に示す殿舎の1つということになる。

ところで、1914年の競売に掛けられた丕顛閣を、最終的に入手したのは中村与資平（1880～1963）という建築家だった。当時の彼は、京城郊外に敷地5000坪に及ぶ広大な自宅を所持していた。

朝鮮銀行が大連に支店を建築するに至り、自分がその設計を依頼されたので、自分も大連に事務所の出張所を設け、：時は大正6年（1917）頃で：会社の京城に於ける外交員松森正金氏を招いて商事部の主任とし工事は藤井嘉造氏を多田順三郎氏の推薦により工事部の主任として日米会社と命名し山県通りの目抜に家を求め堂々と開業した。：経費のみ要して成績は拏がらず何となく危険を感じたので思い切つて松森氏を解任して、業務を縮小した。：明治44年2月朝鮮銀行の建築も無事落成したので、銀行より自分は三ッ組金杯一組並びに金5千円を賞与された。その金で京城南大門外蓬萊町の鳳鶴山に自分の住居を建築した。屋敷は約5000坪で、南山を築山の如く望み、漢江を庭の流れのように見下ろす景勝の地であった²⁷。

このように5000坪の敷地を持つ広大な屋敷をしつらえ、その庭に丕顛閣を移建したのである²⁸。その具体的な経緯については、中村の親族の間では、「朝鮮銀行本店の工事における業績が評価され、李王家から景福宮内にあった丕顛閣という建物を与えられた」²⁹・「京城にあった中村の自宅には、丕顛閣と称した朝鮮建築の亭があり、それは、李王家から中村がもらった」³⁰などの口伝が残されていたようだが、丕顛閣の解体時、景福宮の管理権はすでに李王家

から総督府に移管されており³¹、また公売の際にこの殿舎が売却されたことも確認されるので、他の殿舎の場合と同じく購入によって入手したものと推定すべきだろう。

なお中村と丕顕閣をめぐっては、彼が南大門停留場の裏の蓬萊洞（蓬萊町4丁目）の自分の家を持って行き、設計事務所として使っていたが、漏電によって焼失したという説も紹介される³²。以下に、該当箇所を引用しておこう。

東宮の真ん中にもう一つの便殿である丕顕閣（ヒビョンガク）に対する記録は二つがある。一つはソウル獎忠洞（西四軒町192）の日本人の別荘である南山荘に移ったという記録であり、もう一つは建築家の中村与資平（1880～1963）の記録である。彼は、1912年に丕顕閣を取り外して南大門停留場の裏の蓬萊洞（蓬萊町4丁目）の自分の家を持って行き、設計事務所として使っていたが、漏電によって丕顕閣が焼かれてしまったことを記した。

後者がもっと妥当だと思われる。30歳程度の建築家の仕事だった。

しかしこの説は、中村の事務所と自宅を混同しているなど、再考の余地が大きい。前述のように中村は、1912年に京城黄金町に中村建築事務所を開設したのち、朝鮮銀行からの報奨金で京城蓬萊町4丁目に広大な自宅を購入している。つまり自宅と事務所は別の場所で、失火で焼けたのはこのうち事務所³³で、丕顕閣を置いていたのは5000坪もある郊外の自宅である。

結局、中村は1920年12月の火事で事務所を焼失したことを一つの契機として、京城での業務を廃止し東京へ転居してしまう。その段階で京城の自宅は売却されただろうから、中村の所有からは離れたことだろう。この後、「西四軒町一九二番地南山荘別荘は、建春門内にあった丕顕閣で、南山町二丁目五〇番地の花月別荘は、修政殿の南方にあった一建物である。その他旭町一丁目・桜井町二丁目・岡崎町等に散見する朝鮮式の宏壮なる建物の中には此の際の移築に係はるものが多い」³⁴という記述によれば、1934年の段階で丕顕閣は京城府内の南山荘という料理屋の敷地内に建っていた。つまり公売後、丕顕閣は京城の市街地内を転々としていたらしいのである。その後の行方は定かでないが、朝鮮戦争の開戦までは現存していた可能性も想定できる。

最後に、資善堂について。この殿舎をめぐっては先行研究が豊富で、おおよその経緯が解明されているので³⁵、その成果を簡単に紹介しておこう。

先に丕顕閣について検討した際、この殿舎がもともとは王の利用する施設だったことを述べたが、朝鮮王朝実録を見る限り、資善堂ももとは同様の性格が強い。ただしこの殿舎の場合、関連記事によれば、世宗期の後半頃から世子の利用する施設としての性格を強めていくようである。

16世紀後半に廃絶した後、19世紀に再建された丕顕閣は、朝鮮物産共進会に先立つ敷地整理で競売に掛けられ、仲介者の手をへて大倉喜八郎（1837～1928）の所有となる。船を使って日本に輸送された建材は、東京の大倉集古館で組み立てられ、1916年8月に落成式が行われた（『寺内正毅日記』1916年8月30日）。ところが、1923年9月の関東大震災で倒壊・全焼し³⁶、近年まで礎石だけが残されていた。その後、韓国において景福宮の復元を行うこととなり、1995年、この礎石は復元の参考として所有者の大倉ホテルからサムスン文化財団に寄贈され、80年ぶりに祖国へと帰還している³⁷。

おわりに

以上、本稿では、かつて寺内文庫に存在した「朝鮮館」について、とくにその朝鮮からの移建を中心に検討してきた。その結果、この建物は1918年6月以前に、朝鮮景福宮の繼照殿を移建したものであると判明した。移建後の繼照殿は、所蔵品の保管・閲覧を担う本館に対して、戦前は主に漢学講座などを開く会場として、また戦後は句会、歌会、読書会などのほか、隣接する大学の講義の場としても利用されていた³⁸。実際、戦前の寺内文庫を訪れた人々の観覧記録を見る限り、朝鮮館が展示施設などとして公開されていた形跡は見いだしえず、そこに何かの物品が保管してあったことを記す資料も存在しない。

1922年の寺内文庫の開庫以降、現存する最初の観覧記は1924年5月に訪問した佐藤範雄（金光教の重要人物）一行が残したものである。この訪問については、佐藤本人のほか随行者によっても詳しく記録されている。それによれば、訪問の途上、電車内で寺内寿一と出会い、その配慮もあって文庫では丁寧な接遇を受けている（全体で数ページにわたる相当に詳しい観覧記が残されている）。それにもかかわらず、朝鮮館に関しては随行者の井上が「朱塗の朝鮮館のある寺内邸」と記す程度で、内部の案内を受けた形跡もない³⁹。

続いて1926年頃に訪問したと松田甲(朝鮮総督府嘱託、漢文学者)の場合も、これとほぼ同様である。彼が記す文庫の状況は以下のとおりで、朝鮮館に関する情報はまったく含まれていない。一般に公開されていなかったことは、明らかであろう。

文庫は旧邸地内に耐火材料を以てした宏壮なる二階造りの建物で、極めて幽静閑闊な地域を占めてゐる。階上には皇室より賜はりし種々の貴重品を始め、伯の勲章、衣剣、諸功臣諸名士諸大家の書画等、すべて伯の遺されたる一切の物品を陳列し、階下は図書館として、一般の閲覧者に開放してゐる⁽⁴⁰⁾。

以上のような状況は、1930年代に入っても変化がない。たとえば1938年に文庫を訪問した寺尾宏二(京都帝国大学)は、以下のように記している。

寺内文庫は此地出身寺内正毅元帥の旧邸の一部に建設せるもの、即ち旧邸・文庫と寺内記念館と称する朝鮮景福宮丕蹟閣の一部を移建せる建物とがある。文庫の階上には故元帥が皇室より賜はりし諸種の貴重品をはじめ多くの遺品を陳列し、階下は図書館として公開される⁽⁴¹⁾。

以上のように、戦前の観覧・見学者の手記類で朝鮮館の内部に関する言及がないことは、貴重品の保管・物品の展示・書籍の閲覧などの用途には利用されていなかったことがわかる。戦後に証言されていると同様、普段は空で、必要に応じて何らかの催しや勉強会の類の会場として利用されていたと考えるべきだろう。

なお朝鮮館の廃絶について、明確な時期は不明である。ただし、すでに先行研究で指摘されているように、1946年12月1日付で県と寺内家の間が結んだ賃貸契約書には「朝鮮館平屋建一六坪五」が明記されるのに対し、1952年4月1日付の契約書には記されていないことから、この時期以前に利用されなくなっていたと推定される⁽⁴²⁾。

従来、朝鮮館をめぐるのは、寺内が朝鮮半島で収奪した歴大な文化財や考古遺物を保管・展示する施設だったという言説も一部に存在した⁽⁴³⁾。しかし正式開庫(＝本館完成)までの間、古典籍・古文書類を収蔵する保管庫として利用されていたくらいで⁽⁴⁴⁾、それ以降、保管庫や常設展示室などの機能が担わされたことはなかった。また、そもそも寺内文庫に美術品の類が大量に所蔵され

た史実もない⁽⁴⁵⁾。今後は、事実在即した寺内文庫(あるいは朝鮮館)に関する議論が期待される所以である。



写真2：現存する屋根瓦を3Dスキャンする倉田准教授

附：指図による朝鮮館（寺内文庫）の復元

現在、倉田研治（国際文化学部 准教授）氏を中心に、旧寺内文庫の景観復元が行われている。作業は、現地の実測データのほか、新たに発見された朝鮮館の指図や、寺内文庫本館の平面図などに加え、これまでの調査で収集された各種古写真も参考としながら進行中である。最終成果は、来年度の紀要で紹介予定。乞う、ご期待。

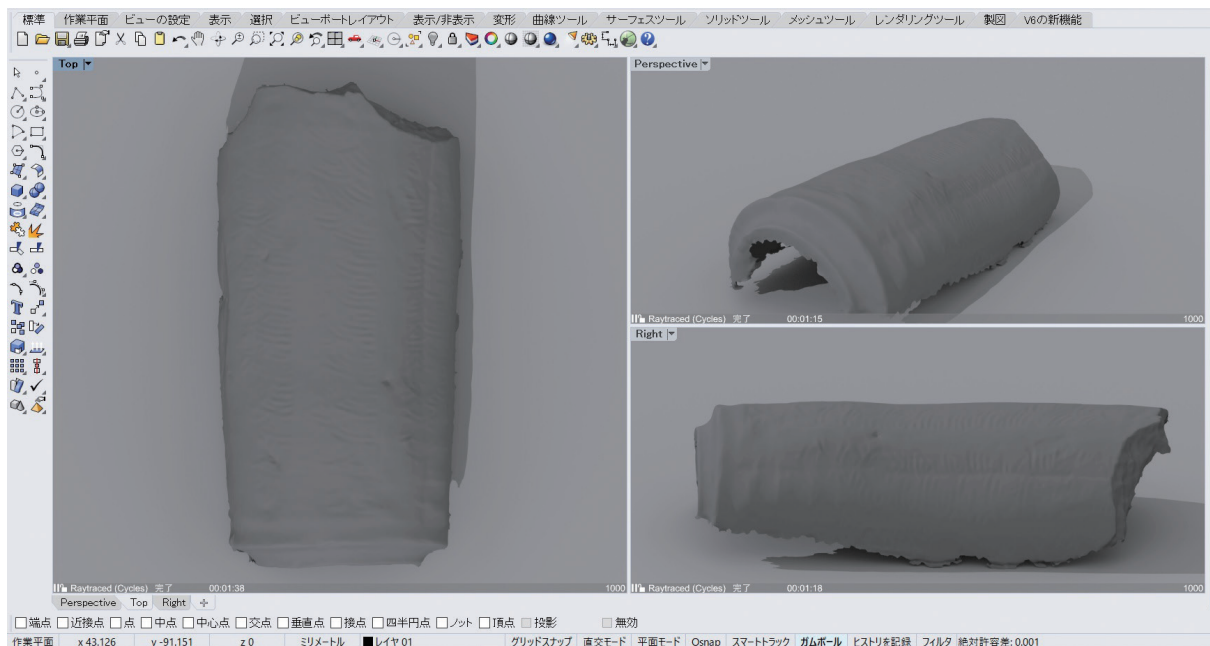


写真3：採取データ

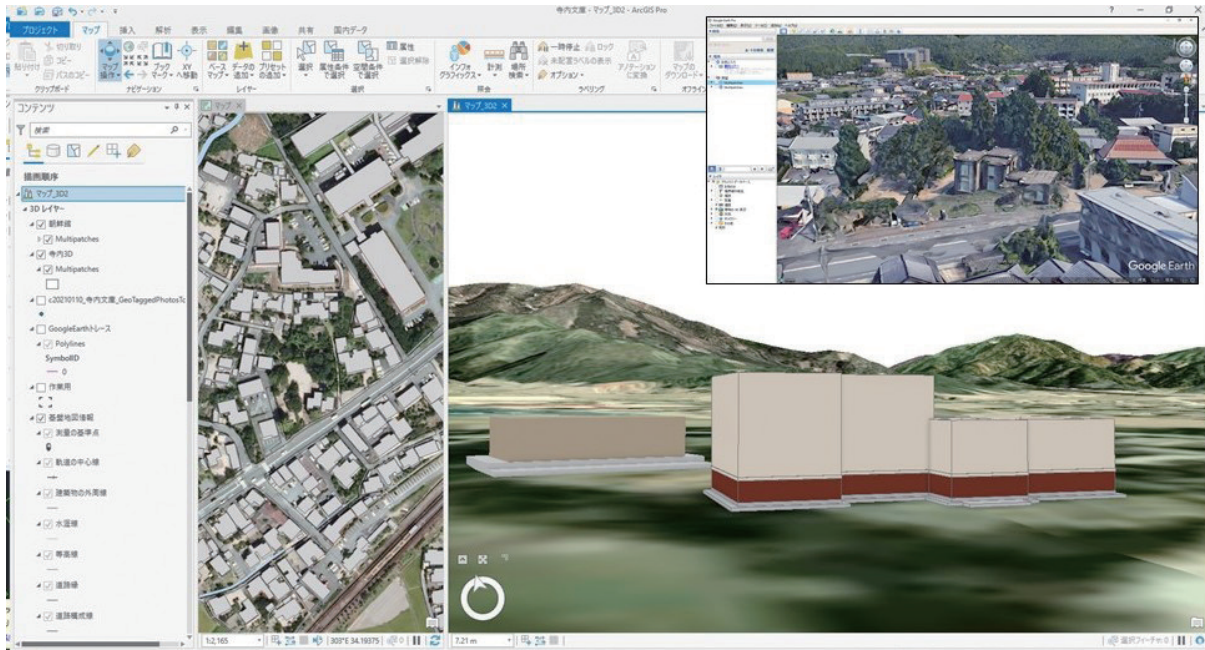


図5：指図などから復元した朝鮮館 1（奥の建物）

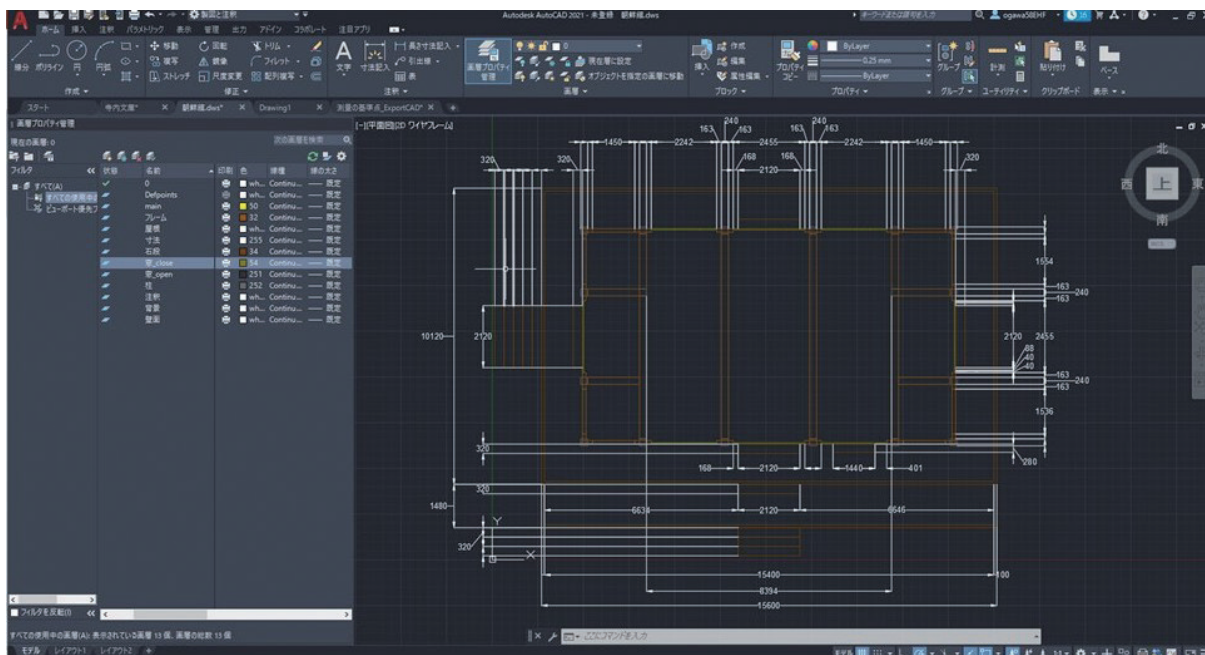


図4：指図などから復元した朝鮮館 2

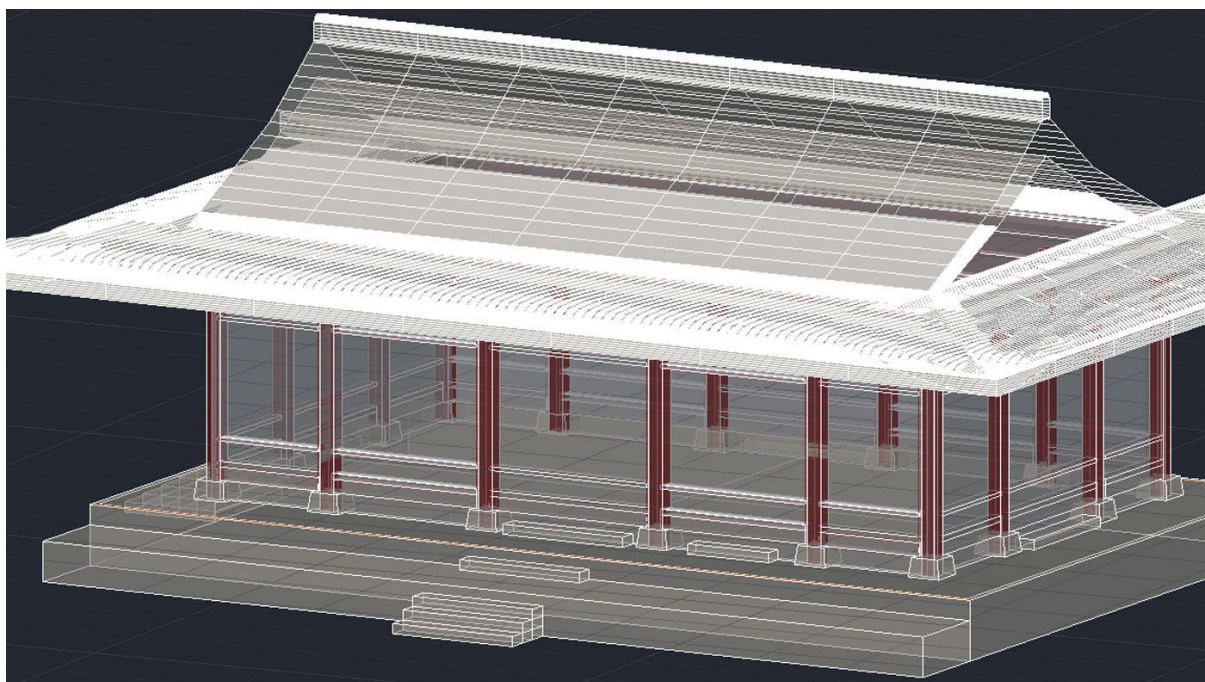


図6：指図などから復元した朝鮮館 3



図7：寺内文庫の本館（参照）

〔注〕

- 1) 本稿の要旨は、すでに渡辺滋「寺内文庫の「朝鮮本」と「朝鮮館」(『社会事業史学会第48回大会 報告要旨集』2020年)において発表している。ただし紙幅の関係で半分以上の記述を削除したので、今回オリジナルのまま公表する。
- 2) 国守進編『桜圃寺内文庫の研究』(山口女子大学歴史学研究室、1976年)によって所蔵品の目録が公開され、その後、伊藤幸司編『桜圃寺内文庫の研究』(勉誠出版、2013年)など複数の専門書で、文庫に関する詳細な検討が進められている。
- 3) 福田東亜「旧寺内文庫」(山口県教育委員会編『山口県の近代化遺産』同委員会、1998年)。
- 4) すでに指摘されるとおり、朝鮮館という名称は明治末期以降、広く用いられたものである。たとえば「午前九時ヨリ夫妻藤田少佐同伴、博覧会朝鮮館ヲ見ル積リニテ同処ニ至ル」(『寺内正毅日記』一九一四年五月十二日条)とあるのは博覧会のパビリオンである。寺内文庫の朝鮮館と同時期に、同じ景福宮から移建された資善堂を、寺内が「四時ヨリ大倉氏博物館ヲ見、朝鮮館落成ヲ見ル」(『寺内正毅日記』一九一六年八月三十日条)と表現している点も参照。なお寺内文庫の朝鮮館については、すでに伊藤幸司氏が各種著作で紹介しているとおり、開庫記念ハガキや、山口市広報広聴課の所蔵写真、寺内寿一を中心に撮影された集合写真(防長尚武館所蔵)、『佐藤先生山陰旅行随行記』(1924年)の口絵写真などが残る。このほか、戦後に撮影されたものとして、米軍が撮影した航空写真(1946年)や、県大関係者の所蔵写真などもある。
- 5) 国守進「桜圃寺内文庫の成立」(伊藤幸司編『桜圃寺内文庫の研究』勉誠出版、2013年、初出1976年)・荒井信一「寺内文庫の寄贈」(『コロニアリズムと文化財』岩波新書、2012年)など。
- 6) 伊藤幸司編著『防長尚武館の寺内正毅・寿一関係資料』(山口県立大学、2016年)。
- 7) 景福宮の焼失について、韓国では日本軍が焼き払ったとする理解も根強く存在する。しかし、そうした見解が基本史料の誤読に基づくものであること

は、君島和彦「景福宮を中心とした日韓関係史」(『日本歴史学協会年報』35、2020年)・同「壬辰戦争と景福宮」(『日韓相互認識』10、2020年)などの指摘を参照。実際には、朝鮮側の姦民・乱民の放火により全焼している(『宣祖実録』宣祖二十五年(1592)四月十四日条)。

8) 山中峯雄『大院君実伝』(博文館、1894年)。

9) 移建された殿舎について、先行研究では「古建築」と説明されることも多いが、誤解である。渡辺滋「寺内正毅をめぐるイメージの拡散過程―寺内文庫とその収蔵品に関する問題を素材として―」(山口県立大学 国際文化学部紀要) 27、2021年)も参照。

10) 朝鮮総督府編「記念共進会」(『朝鮮総督府施政年報 大正四年度』同府、1917年)。朝鮮物産共進会については、李泰文「1915年「朝鮮物産共進会」の構成と内容」(『慶応義塾大学日吉紀要 言語文化・コミュニケーション』30、2003年)・全東園「朝鮮物産共進会と「朝鮮文化財」の誕生」(『言語・地域文化研究』15、2009年)・李東勲「始政五年記念朝鮮物産共進会」と植民地空間」(『在朝日本人社会の形成』明石書店、2019年、初出2015年)などを参照。

11) 朝鮮総督府編「会場内施設物」(『始政五年記念朝鮮物産共進会報告書』同府、1916年)。

なおこの時期に進められた景福宮の殿舎撤去については、「無益な破壊」(柳宗悦「失われんとする一朝鮮建築のために」『柳宗悦全集 著作篇6』筑摩書房、1981年、初出1922年)などと同時期の日本人からも非難されている不評な施策だったが、その背景について、谷川竜一「*조선*度の近代―韓国・景福宮前の建築交代を読む―」(『世界のエスキス―地域のカタチを読み解き、地域像を描き出す―』38、2014年)は従来のステレオタイプの説明と異なる興味深い分析を示している。

建物の交替に関して、王宮内の庁舎の建設は日本が王朝の権威をのっとるためであったとか、あるいはその後の庁舎の撤去は、庁舎を支配のシンボルとして撤去することで、国民統合やナショナリズムを強化するための植民地支配の克服セレモニーだったという解釈や理由が、現在も広く人口に膾炙しています。…(しかし)結論としては次のようなことが言えると思

います。朝鮮総督府庁舎は、近代的な空間軸という概念をソウルに持ち込んだ結果、景福宮の空間をその外部空間であるソウルの都市構造と結びつける必要を生み出してしまいました。そのため、景福宮の空間軸と光化門通り・太平通りの空間軸の不一致が「ズレ」として認識され、以降はずっとその処理に翻弄されることになったのです。景福宮前の建物の交代劇の黒幕は、植民地化・「近代化」の過程で持ち込まれた空間軸という思考であったと言えるのではないのでしょうか。

12) 参考までに、書状全文を掲げておく。なおこの書状には、朝鮮館の指図(後掲)が同封されている。この実測図がどの段階で作成された図なのかは不明だが、片仮名が混じるので日本人の手になることは間違いない。おそらくは日本への移建の際に、それを担当した「工匠」(宮大工)の手で製図されたものだろう。

御書卒読、時下春和之節、益々御清祥ニ在させられ珍重奉存候。爾来御無沙汰ニ打過、恐縮之至り、御寛恕奉願候。却説御申越候設計図、不取敢加封致候。見積書ハ前年御先考閣下へ該素図貴覽ニ入れ候節、御手許ニ御留置相成候様存られ、今ハ小生手許ニ無之候。将又過般も申上居候通り、右工匠既ニ故人ニて、再調も出来不申遺憾之事ニハ御座候。早くも幸ニ、此之図ハ御先考閣下ニ御意図を筆ニ現はせ候点ハ確ニ御座候。右奉得御意度候。／謹言 四月九日／熊谷直之／頓首／寺内閣下 侍側

京洛之春光、今よりいそかしく候。御一遊如何奉侍候。／再拜

13) 京城市史編纂委員会「大院君執政時代の京城」(『京城府史 1』京城府、1934年)。

14) 寺尾宏二「広島・山口両県下史料探訪旅行記」(『経済史研究』20—3、1938年)。

15) 廉復圭／橋本妹里訳「帝国の文明、都城を解体する」(『ソウルの起源 京城の誕生—1910—1945 植民地統治下の都市計画—』明石書店、2020年)。なお総督府に移管される以前、いまだ宮内府の管理下にあった1910年の段階で、売却が開始されていたことは、宮崎涼子「韓国併合と景福宮」(『未完の聖地 景福宮—宮城再編事業の100年—』京都大学学術出版会、2020年)を参照。すでに李朝末期には、長らく利用されず

荒廃した多数の殿舎を維持管理することが負担になっていったという現実問題も、その背景にあったと思われる(ウィーベ・カウテルト「景福宮から朝鮮博覧会場への空間変貌」佐野真由子編『万国博覧会と人間の歴史』思文閣出版、2015年)。

16) 「大正三年の入札払下—景福宮構内—」(『朝鮮総督府官報』576号、1914年7月3日)。

17) 朝鮮総督府注11論文(適宜、句読点を補充)。

18) 『毎日申報』1914年7月10日。

19) 朝鮮総督府編『朝鮮古蹟図譜 10』(同府、1930年)。

20) なお寺内文庫の朝鮮館については、このほか「1913年に撤去した円丘壇付属の建物の資材を、寺内が落札して建てた」とする説もあるが(姜燐静ほか「桜圃寺内文庫」黄寿永編『韓国の失われた文化財』三一書房、2015年)、形状が合致しないこともふまえて検討対象とはしない。

21) 尹張燮／西垣安比古訳「朝鮮王朝の宮殿建築 景福宮」(『韓国の建築』中央公論美術出版、2004年)。

22) 木村幹『高宗・閔妃』(ミネルヴァ書房、2007年)。

23) 小田幹治郎「景福宮の沿革」(『小田幹治郎遺稿』小田梢、1931年、初出1915年)。

24) 杉山信三『韓国の中世建築』(相模書房、1984年)。

25) 李起雄「景福宮の沿革」(『韓国の古宮建築』悦話堂、1988年)。

26) 桑野栄治「朝鮮初期の「禁苑」—景福宮後苑小考—」(橋本義則編『東アジア都城の比較研究』京都大学学術出版会、2011年)。

27) 『中村与資平自伝』(<https://trc-adeac.trc.co.jp/Home/2213005100/topg/22nakamura.html>)掲載)。

28) 西沢泰彦「植民地銀行に腕をふるった建築家」(『東アジアの日本人建築家』柏書房、2011年)。

29) 西沢泰彦「植民地の社会と建築」(『日本植民地建築論』名古屋大学出版会、2008年)。

30) 西沢注28論文。

31) 廉注15論文は、「併合後1年も経たない1911年5月に、庁舎新築の敷

地確保のため、総督府が李王職(植民地期に旧皇室関連事務を担当した機関)から景福宮全体の管理権を譲り受けた」と指摘する。

32) 金晶東「東京で探した資善堂」(『일본을 걷는다—일본 속의 한국 근대사 현장을 찾아서—』(한양출판, 1997年)。本論文の翻訳については、洪寅植氏のご協力を得た。

33) 西沢注28論文。

34) 京城府史編纂委員会注13論文。

35) 金注32論文。このほか、宮崎注15論文に詳しいので関連記述を引用しておく。

美術館の建設敷地とされた勤政殿の東方一帯は、かつては王世子の政務空間と生活空間である東宮が構成されていたエリアである。中でも資善堂は、王世子夫妻の居所とされた殿閣であったが、庁舎建設にともなう殿閣撤去に關与した株式会社大倉組土木部が、その部材を引き取ったとされる。『建築世界』1916年9月号と『建築画報』1916年10月には、大倉喜八郎が1915年冬に資善堂を譲渡されて東京に移送し彼が東京市赤坂葵町の自宅内に設けた私立美術館・集古館の境内において、約2万円を費やして組み立てる工事を終え、内外装飾工事に着手し、1916年9月中旬に竣工するとの記事が見られる。また、寺内正毅は、1916年8月30日の日記に、「午后…四時ヨリ大倉氏博物館ヲ見、朝鮮館落成ヲ見ル」と記録している。

その名が示すとおり、日本風が加味されることなく、朝鮮式の建築様式が温存された「朝鮮館」は1917年に開館するが、1923年9月1日に発生した関東大震災により、基壇等を残して焼失してしまう。焼け残った基壇は、戦後に同地で開業したホテルオークラ内で、石花盆(石の植木鉢)として使用されていることを韓国近代建築学者の金晶東が突き止め、1996年、大倉事業株式会社決定とサムスングループによる解体・輸送費負担により、重さ110トンの遺石288個が韓国に返還され、文化財管理局(現・文化財庁)に寄贈されることとなる。

ちなみに、京城府が1930年代に編纂した『京城府史』によれば、集古館には1910年の殿閣整理時に売却された殿閣一つも移築されていた

とされる。大倉集古館は朝鮮館のほか、第一、第二、第三の陳列館により構成されるが、パク・ソンジンは、三つの陳列館のうちのいずれかに、この殿閣が使用されていた可能性があると推測している。

36) 仙人掌「大倉集古館」(『中央史壇』9-3, 1924年)。このほか、大倉集古館『大倉集古館列品要略』(同館, 1920年)も参照。

37) この際の「返還」については、中野茂樹(波佐場清)「李王宮の復元に「遺構を返して」」(『AERA』387, 1995年)・「景福宮資善堂の遺構、元の場所に戻る」(『東亜日報(日本語版)』2013年7月13日)も参照

38) 国守注5論文・伊藤幸司「桜圃寺内文庫の変遷と現状」(同編『桜圃寺内文庫の研究』勉誠出版, 2013年)・福田百合子「図書館と私」(山口女子大学編『山口女子大学五十年史』同大, 1992年)・同「寺内文庫と私」(『郷土文学資料センター』22, 2013年)ほか。

39) 井上鍵之助編『佐藤先生山陰旅行随記』(神徳書院, 1924年)・佐藤範雄「信仰回顧六十五年下」(同書刊行会, 1971年)。

40) 松田甲「山口洞春寺の朝鮮古書附桜圃寺内文庫」(『日鮮史話』2)朝鮮総督府, 1926年)。

41) 寺尾注14論文。

42) 山口県立女子専門学校に1944〜47年にかけて在籍した女性は、自分の卒業後、朝鮮館が「ある日突然大音響と共に崩れ落ちた」との話を伝え聞き、そのことを感慨深く記録している(賀屋道子「国語科の思い出」山口女子大学編『山口女子大学五十年史』同大, 1992年)。この建物の遺物で現存するのは、1980年に敷地内から発見された瓦(山口市歴史民俗資料館の所蔵)くらいとされる。

前述した平面図によれば、朝鮮館の面積は全体で30坪強ある。1946年の契約書に半分の面積しか示されていないのは、おそらくすでに崩壊が始まっていたからであろう。福田百合子氏(山口県立大学名誉教授)の証言によれば、1945〜48年頃、建物に部分修繕を加えながら利用していたが、破損(とくに屋根部分)の広がりから利用可能なスペースは次第に減少していったという。なお先行研究では、1952年の賃貸契約書に朝鮮館に関する記載が見えないことから、これ以前に撤去されていた可能性を想定する

が、福田氏は、以上の破損状態も念頭に置き「契約書の文面に朝鮮館が見えないことは、かならずしも朝鮮館が消滅したことを意味はしない」と指摘する（2020年4月22日の聞き取りによる）。

この破損は、文庫から寺内家へと送られていた毎月の収支報告書によれば、1930年代には問題化していた。たとえば1939年1月の報告書には「朝鮮館屋根大修繕」の予算が、また1941年8月の報告書には「朝鮮落雷被害復旧費」が、それぞれ計上されている（山口県立大学 寺内文庫 新収23―1）。

なお朝鮮館の消滅をめぐるのは、「元帥が朝鮮から持ち帰った『朝鮮館』は、終戦と同時に韓国人が解体して祖国へ運んだ。おそらく寺内の戦利品と思っただろう」（村田公亮「SLも『寺内レール』の上を走る」『防長政界の波乱と秘話』夕刊やまぐち新聞社、1979年）との情報もあるが、根拠のない噂に過ぎない。

43) こうした誤情報に基づき、たとえば日韓国交正常化交渉の過程で、韓国側は「寺内朝鮮館」の所蔵する美術品の返還を執拗に求めている。朴薫「日韓会談における文化財「返還」交渉の展開過程と争点」（李鐘元ほか編『歴史としての日韓国交正常化Ⅱ 脱植民地化編』法政大学出版局、2011年）などを参照。

44) たとえば寺内正毅「桜圃文庫ノ記」（1919年）で、本館建設前の時期に「先ツ書庫ヲ開キテ其ノ既ニ蒐集スル所ノ史書ヲ蔵シ」と述べるところや、「桜圃文庫処務の概要」（前掲）の記述から、正式開庫前に朝鮮館で典籍・古文書を保管していたことが分かる。その容積を念頭に置けば、典籍・古文書以外のものまで収めてあった可能性は低い。現存する寺内文庫の史料中に、書籍以外の物品はまとまった形では姿を見せおらず、一部に噂される美術品などは基本的に存在していなかったと考えてよい。

45) この点については、渡辺注9論文も参照。

謝辞・本稿の執筆に当たっては、伊藤幸司氏（九州大学）・畔津忠博（山口県立大学）・菱岡憲司（同）などのご助力・ご援助を得た。厚くお礼申しあげる。